

# 日本家政学会誌, 風俗, 生活学における食文化関連論文

著者	桑畑 美沙子
雑誌名	熊本大学教育学部紀要 人文科学
巻	47
ページ	57-68
発行年	1998-12-18
その他の言語のタイトル	Papers Concerned with Culture of Dietary Habits in Journal of Home Economics of Japan, Historical Review on Manners and Customs and Seikatsugaku
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/1106">http://hdl.handle.net/2298/1106</a>

# 日本家政学会誌, 風俗, 生活学における食文化関連論文

桑畑美沙子

## Papers Concerned with Culture of Dietary Habits in "Journal of Home Economics of Japan", "Historical Review on Manners and Customs" and "Seikatsugaku"

Misako KUWAHATA

(Received September 1, 1998)

### 1. 緒言

戦後の50年余りを振り返ってみると、国民の生活はめざましく変化した。食生活に関していえば、飢餓から解放され、豊かになってきた。それに伴って、体位は改善され、栄養不足による疾病は減少した。その一方で、飽食・グルメブーム、孤食・個食、肉食・中食・外食などのキーワードで表現される事象も生じている。

ところで、日本家政学会（以下、家政学会と略す）の場合、食物領域に関する研究は、長い間、栄養学、食品学、調理学が3本の柱とされて進められてきた<sup>1)</sup>。近年、それらに加えて、食べるという生活行為自体にかかわる研究もなされている。このような変化は、先に述べた食の情勢を正視しながら食をいわば単なるモノや技術の側面だけでなく文化という視点も加味されて研究がなされるようになったからであろう。

では、このような動きは日本家政学会誌（以下、家政誌と略す）にどう反映されているのだろうか。本研究では、家政誌に掲載された食文化にかかわる研究がなされたと思われる論文（以下、食文化関連論文と略す）の研究内容、対象、および手法を検討した。併せて、日本生活学会、日本風俗史学会の学会誌である生活学（以下、生活学と略す）や風俗（以下、風俗と略す）に掲載された食文化関連論文も同様に検討した。その結果、若干の知見が得られたので報告する。

### 2. 研究方法

#### (1) 食文化の概念

食文化という言葉は汎用されているものの、現時点において言葉だけが先行していて定義が明確にされているとは言い難い<sup>2)</sup>。そこで、本研究は、石毛<sup>3)</sup>、石川<sup>4)</sup>、杉田<sup>5)</sup>、豊川<sup>6)</sup>、米川<sup>7)</sup>らの論考を参考にし、食文化を「人間が自然や社会に対処しながら蓄積し、蓄積している食に関する行動様式の総体」ととらえることにした。つまり、食文化を食べものの調達・調理加工・喫食・片付けという一連の行為と、それらの行為に必要な技術や道具、施設や経費、およびその背景にある思想や哲学も含む概念と考えたのである。

#### (2) 分析対象

まず、家政誌の1～46巻、風俗の1～122巻、および生活学の1～20巻に掲載された論文の表題から、先に述べた食文化の概念にかかわる研究がなされていると思われる論文を取り出した。次に、各論文の内容を検討し、分析対象の論文を確定した。分析対象と確定された食文化関連論

文は、家政誌の115編、風俗の76編、生活学の41編、計232編である。なお、これらの論文はいわゆる食物領域の論文だけではない。住居、家庭経済、家庭経営などの領域の論文も含まれている。台所などの施設・設備、食費、食にかかわる家事労働などに関する研究がなされていれば、食文化関連論文としたからである。

### (3) 検討項目

分析対象の食文化関連論文について、①掲載状態、②研究された食文化の内容、③食文化が研究された時代、地域、階層、およびそれらが選定された際の視角の明確さ、④統計的な処理を含む研究手法について検討した。

なお、分析対象の論文は、それぞれの著者が各自の問題意識にもとづいて取り組んだ研究の成果であり、本研究における分析の枠組みにそって食文化が研究されたものではない。そのため、論文の内容、対象、手法は本研究の分析枠組みに全面的に対応しているのではなく、一つあるいは複数の集計区分に該当している。それで、視角の明確さと統計的な処理の有無以外の項目は、ダブルカウント方式で集計してある。

## 3. 結果および考察

### (1) 食文化関連論文の掲載状態

表1に、食文化関連論文数と全掲載論文数に占める割合を年代別に示した。なお、本研究では、年代を、1951～1959年、1960～1969年、1970～1979年、1980～1989年、1990～1995年の5期に区分している（以下、それぞれ、Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期、Ⅳ期、Ⅴ期と記す）。この時代区分は、Ⅰ期が9年間、Ⅴ期が6年間で等分割になっていない。これは家政誌の発刊が1951年であること、分析着手時期が1996年4月であったためである。Ⅰ期はともかくⅤ期は検討対象から省くべきとも考えられるが、最近の食文化研究の動向も把握したいと考えて分析対象に加えた。このことを示すため、以下の表ではⅣ期とⅤ期の間に波線が入れている。

表1. 食文化関連論文数と、全掲載論文数に占める割合

年 代	家 政 誌						編 (%)			
	報 文		資 料		計		風 俗		生 活 学	
	全掲載論文	食文化論文	全掲載論文	食文化論文	全掲載論文	食文化論文	全掲載論文	食文化論文	全掲載論文	食文化論文
'51～50	382(100.0)	20( 5.2)	1(100.0)	—	383(100.0)	20( 5.2)	—	—	—	—
'60～69	868(100.0)	13( 1.5)	17(100.0)	—	885(100.0)	13( 1.5)	90(100.0)	11(12.2)	—	—
'70～79	809(100.0)	6( 0.7)	47(100.0)	3( 6.4)	898(100.0)	9( 1.0)	122(100.0)	33(27.0)	45(100.0)	9(20.0)
'80～89	883(100.0)	20( 2.2)	116(100.0)	22(19.0)	1107(100.0)	43( 3.9)	138(100.0)	26(18.8)	71(100.0)	24(33.8)
'90～95	522(100.0)	22( 4.2)	43(100.0)	7(16.3)	642(100.0)	30( 4.6)	49(100.0)	6(12.2)	47(100.0)	8(17.0)
合 計	3464(100.0)	81( 2.3)	224(100.0)	32(14.3)	3915(100.0)	115( 2.9)	399(100.0)	76(19.0)	163(100.0)	41(25.2)

注1) — : 該当論文なし、注2) 食文化論文 : 食文化関連論文

家政誌は他の2誌に比べ、食文化関連論文数は多かったが、全掲載論文数に占めるその割合は低かった。

食文化関連論文を年代別にみると、家政誌は論文数も割合もⅡ期からⅢ期に減少しⅣ期に再び増加していた。風俗と生活学は、論文数も割合も前誌はⅢ期が後誌はⅣ期が最多であり、以後両誌とも減少していた。

ところで、家政誌には、報文、資料、ノート、総説、学会賞受賞記念論文などが掲載されている。食文化関連論文は報文と資料とノートに見いだされ、総説、学会賞受賞記念論文には見いだ

されなかった。表より、合計をみると、論文数は報文が多いものの、全掲載論文数に占める割合は資料が高かった。年代別にみると、報文としての食文化関連論文の掲載状態は、先に述べた家政誌の動向と類似していた。一方、資料はⅢ期から出現し、論文数も割合もⅣ期で最多であった。なお、表中に示していないが、ノートはⅣ期とⅤ期に1編ずつ見いだされた。

家政誌の報文では、1951年の発刊以来、食物領域の論文が常に半数近くを占めている<sup>8)</sup>。本研究の食文化関連論文は、食物だけでなく、住居、家庭経済、家庭経営など他領域の論文も含まれているにもかかわらず、その割合はいずれの年代も数%に過ぎなかった。また、資料という形式の論文は1951年から掲載され、全掲載論文数に占める割合は95年までで5.7%であった。一方、資料としての食文化関連論文はⅢ期から掲載され、全食文化関連論文数の27.9%を占めていた。さらに、これを年代別にみると、Ⅲ期が30.0%、Ⅳ期が51.1%、Ⅴ期が23.3%で、いずれの年代も高率であった。

以上のことから、家政誌の食文化関連論文は、①他誌に比べ、論文数は多いが全掲載論文数に占めるその割合は低く、②特に、報文でなく資料として掲載されている論文の割合が高いことから、③資料として掲載されている傾向にあると推察される。

なお、先に述べたように、ノートとして掲載された食文化関連論文はⅤ期で2編と少ないため、以下の検討は割愛する。

## (2) 研究内容

分析対象の食文化関連論文は、①生産から廃棄までの食行動、②食べものにかかわる経済や教育、③食行動にかかわる施設や食器・食具、④食べものの摂取量、⑤食べものや食行動にかかわる意識や思想、⑥食べものや食行動にかかわる伝承、⑦供食を職業としている施設や人などについて研究されていた。その結果を図1に示した。なお、図では、①より⑦を、①食行動、②経済・教育、③食器・食具、④摂取量、⑤意識・思想、⑥伝承、⑦料理店・料理人と略してある。

家政誌の報文や資料、また風俗や生活学において研究された具体的な内容は類似しており、いずれも90%以上の論文で食べものの生産から廃棄までの食行動が研究され

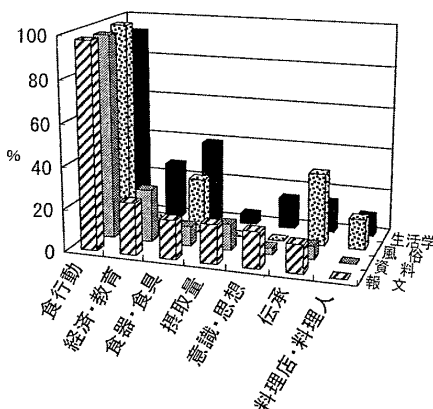


図1 研究された内容

□ 報文 ■ 資料  
▨ 風俗 ■ 生活学

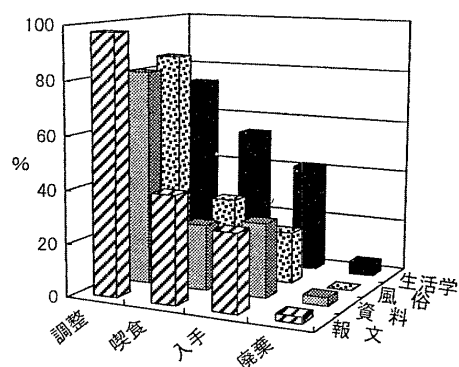


図2 研究された食行動

□ 報文 ■ 資料  
▨ 風俗 ■ 生活学

ていた。しかし、①報文や資料は供食を職業としている施設や人に関する論文が、②風俗は食べものの摂取量、食べものや食行動にかかわる意識や思想に関する論文が皆無であり、③生活学は食べものの摂取量に関する論文の割合が5%と低かった。なお、図表として提示していないが、以上の傾向はいずれの年代においても類似していた。

ところで、食行動としてどのような行動が研究されているのであろうか。食行動を、①生産・入手・流通などの入手段階、②貯蔵・調理加工・献立作成などの調整段階、③膳立てや喫食などの喫食段階、④片付け、ごみ処理などの

廃棄段階の4つに区分して検討し、その結果を図2に示した。なお、図では、①より④を、それぞれ、①入手、②調整、③喫食、④廃棄と略してある。

食行動の内容も類似し、いずれも調整段階の食行動に関する論文が圧倒的に多く、廃棄段階に関する論文が少なかった。なお、以上の傾向は、図表として提示していないが、いずれの年代においても類似していた。

以上のことから、報文、資料、風俗、および生活学において、①食べものの生産から廃棄までの食行動、②その中で、貯蔵・調理加工・献立作成などいわば調整段階に関して研究され、③片付け・ごみ処理などの廃棄段階に関してはほとんど研究されていないことが明らかになった。

近年、環境の保全は地球規模で取り組まねばならない課題とされている。家政学が生活の向上と人類の福祉に貢献する実践的総合科学をめざす学問ならば、学会においても食べものの廃棄に関する研究が取り組まれねばなるまい。

### (3) 研究対象

食文化の研究に際して、あらゆる時代、地域、階層に関して明らかにされるとともに、それらが明確な視角で選定される必要がある。このような観点から、以下で食文化が研究された時代、地域、階層とそれらの視角の明確さを検討する。

#### 1) 時代

表2に、食文化が研究された時代を年代別に示した。なお、ここでは時代を①原始時代、②古代と中世と近世（以下、前近代と略す）、③明治から昭和20年8月15日まで（以下、近代と略す）、④それ以降（以下、現代と略す）の4つに区分した。なお、表1に示したように報文、資料、風俗、生活学における年代別の論文数がいずれもそれほど多くないため、以下で年代別に検討する際に提示した。表では食文化関連論文に占める割合を割愛してある。

表2. 食文化が研究された時代

(編)

年代	家 政 誌					風 俗					生 活 学				
	報 文					資 料					計				
	A	原始	前近	近代	現代	A	原始	前近	近代	現代	A	原始	前近	近代	現代
'51~50	20	—	1	1	20	—	—	—	—	—	20	—	1	1	20
'60~69	13	—	1	2	13	—	—	—	—	—	13	—	1	2	13
'70~79	6	—	—	3	3	—	2	—	2	9	—	2	—	8	33
'80~89	20	—	5	1	15	22	—	8	2	12	43	—	13	3	28
'90~95	22	—	8	4	15	7	—	1	—	6	30	—	9	4	22
合 計	81	—	15	8	69	32	—	11	2	20	115	—	26	10	91

注1) —: 該当論文なし, 注2) A: 食文化関連論文, 注3) 原始: 原始時代, 注4) 前近: 前近代

合計をみると、報文は現代の食文化に関して研究された論文が特に多く、原始時代が皆無で近代が少なかった。この傾向は資料でも見られたが、報文に比べ現代が少なく前近代が多かった。風俗は前近代が多く、どちらかと言えば現代が少なかった。生活学も報文や資料と同様に現代が多く原始時代が少なかったが、報文や資料と異なり近代が多く前近代が少なかった。なお、3誌の食文化関連論文を合計すると、原始時代に関する論文が19編(8.2%)、前近代が82編(35.3%)、近代が45編(19.4%)、現代が142編(61.2%)で、全体的には、現代の食文化が多く研究され、原始時代の食文化があまり研究されていないといえる。

年代別にみると、いずれの年代も、報文、資料、生活学は現代、風俗は前近代の論文が多かった。

以上のことから, ①食文化が研究された時代は報文, 資料, 生活学, 風俗の各論文において異なり, ②報文は特に現代の食文化に関して多くの論文で研究され, 報文も資料も原始時代が全く研究されていないことが明らかになった. したがって, ③家政誌では, 今後, 食文化が研究される対象としての時代が拡大されること, 特に原始時代や近代の食文化についても究明されねばならないであろう.

## 2) 地域

表3に食文化が研究された地域を示した. なお, ここでは地域をまず国外と国内に分け, 国内をさらに②都市, ③農山村, ④漁村と, ⑤いずれにも属さない区分不能の5つに区分した.

表3. 食文化が研究された地域

表 3. 食文化が研究された地域									% (編)
学 会 誌	食文化論文	国外	国 内						
			論文数	都市	農山村	漁村	不能		
家政誌	報文	81(100.0)	—	81(100.0)	35(43.2)	16(19.8)	12(14.8)	32(39.5)	
	資料	32(100.0)	3( 9.4)	32(100.0)	9(28.1)	5(15.6)	—	18(56.3)	
	計	115(100.0)	3( 2.6)	115(100.0)	45(34.9)	21(14.2)	12(10.4)	51(41.4)	
風 俗		76(100.0)	26(34.2)	62( 81.5)	27(35.5)	7( 9.2)	2( 2.6)	29(38.2)	
生 活 学		41(100.0)	11(26.8)	33( 80.5)	9(21.9)	5(11.9)	7(17.1)	16(39.0)	
合 計		232(100.0)	40(17.2)	210( 90.5)	81(34.9)	33(14.2)	21( 9.1)	96(41.4)	

注1) — : 該当論文なし, 注2) 食文化論文 : 食文化関連論文, 注3) 不能 : 区分不能

報文は国内の食文化に関してのみ研究され, 国内としては都市の食文化が多くの論文で研究されていた. 資料は, 国外に関しても研究されていたが, 全ての論文で国内に関して研究され, 国内としては都市にも農山村にも漁村にも区分できない, つまり日本ではあるが地域を特定できない論文が多かった. 風俗は国内に関する論文が多かったが, 国外に関して研究された論文も26編あり, 国内としては区分不能と都市に関する論文が多かった. 生活学は風俗と傾向が類似し, 国内に関する論文が多かったが, 国外に関する論文も11編あり, 国内としては区分不能の論文が最多で, 次に都市に関する論文が多かった. また, 3誌の食文化関連論文を合計すると, 210編(90.5%)で国内の食文化に関して研究され, 国内として最多は区分不能の論文の96編(41.4%)で, 次に都市が多く(81編, 34.9%), 漁村は少なかった(21編, 9.1%). なお, 図表として提示していないが, 以上の傾向はいずれの年代においても類似していた.

以上のことから, ①食文化が研究された地域は報文, 資料, 生活学, 風俗の各論文において若干異なり, ②家政誌は国内の都市の食文化に関して研究された論文が多く, 国内の漁村や農山村, それに国外に関する論文が少なく, 報文は国外, 資料は漁村に関する論文が皆無であった. したがって, ③家政誌では, 今後研究対象としての地域が拡大されること, つまり国外それに国内の漁村や農山村の食文化に関しても研究されねばならないであろう.

## 3) 階層

表4に, 食文化が研究された対象の階層を年代別に示した. なお, ここでは階層を①上層, ②中層, ③下層と, ④これらのいずれに属するか判定しがたい区分不能の4つに区分した.

階層の区分や基準をどう設定するかはさまざまに考えられる. 本研究は, ①例えば「農業を中心とした中堅層の……」<sup>9)</sup>のように, 本文中に階層が示唆されている場合はそれを尊重し, ②記載されていない場合は, 各時代における社会的な立場から位置づけることとした. 記載されていない場合の区分を論文中の表記で具体的に示すならば, ①上層は, 天皇家, 公家, 貴族, 将軍家, 大

表4. 食文化が研究された階層

(編)

年 代	家					政					誌					風					俗					生					活					学				
	報		文			資		料			計		上層			中層		下層			不能		上層		中層		下層			不能		上層		中層		下層			不能	
	A		上層	中層	下層	不能	A		上層	中層	下層	不能	A		上層	中層	下層	不能	A		上層	中層	下層	不能	A		上層	中層	下層	不能	A		上層	中層	下層	不能				
'51~50	20	—	20	—	—	—	—	—	—	—	—	20	—	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
'60~69	13	1	13	1	—	—	—	—	—	—	—	13	1	13	1	—	11	6	4	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
'70~79	6	—	6	—	—	3	2	2	—	—	9	2	8	—	—	33	14	14	2	9	9	1	9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
'80~89	20	7	13	—	3	22	4	15	—	5	43	11	28	—	9	26	14	8	3	9	24	3	16	4	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
'90~95	22	5	12	—	7	7	1	5	—	2	30	6	18	—	9	6	4	3	1	2	8	—	8	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
合 計	81	13	64	1	10	32	7	22	—	7	115	20	87	1	18	76	38	29	6	22	41	4	33	5	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		

注1) —: 該当論文なし, 注2) A: 食文化関連論文, 注3) 不能: 区分不能

名, 平安時代の僧侶<sup>10)</sup>, 江戸時代の幕吏<sup>11)</sup>, 明治時代の工学博士や医学博士<sup>12)</sup> など, ②中層は, 古墳時代から平安時代の庶民<sup>13)</sup>, 鎌倉時代から室町時代前期における鍛冶職人<sup>14)</sup>, 江戸時代の下級武士や町人<sup>15)</sup>, 明治時代のミドルクラス<sup>16)</sup>, 昭和30年頃の生活改善農家<sup>17)</sup>, 昭和30年代末の恵まれた給与生活者<sup>18)</sup> など, ③下層は, 鎌倉時代から室町時代前期における乞食<sup>19)</sup>, 1977年における年収が全国平均の1/4程度の離島民<sup>20)</sup> などである. このように区分すると, 大半の人々が中層に位置づけられ, 上層と下層に位置づけられる人々は少数となる. それにもかかわらず, このように区分したのは, 一般大衆的な人々とそうでない人々に二分し, 一般大衆的でない人々をさらに上と下の階層に分けて検討したいと考えたからである.

合計をみると, 報文, 資料は中層の食文化に関して研究された論文が多く, 下層に関する論文が少なかった. 風俗は上層に関して最も多かったが, 中層に関する論文も多く, また下層に関する論文も見いだされた. 生活学は報部叩や資料と同様に中層に関する論文が多かったが, 少数ではあるが上層と同じ程度に下層に関する論文も研究されていた. 3誌の食文化関連論文を合計すると, 中層の食文化に関して研究された論文が149編(64.2%), 上層が62編(26.7%), 下層が12編(5.2%), 区分不能が45編(19.4%)で, 中層に関する論文が多く研究され下層に関してはあまり研究されていないといえる.

年代別にみると, 報文はⅢ期まで全論文で中層に関する論文が研究されていたが, Ⅳ期以降上層に関する論文も研究されていた. 資料はⅢ期以降中層に関する論文が多くなり, 上層に関する論文が少なくなっていた. 生活学も一貫して中層に関する論文が多かった. 風俗はいずれの年代も上層と中層に関する論文がほぼ同数で, Ⅲ期以降にわずかながら下層に関する論文も見いだされた.

以上のことから, ①食文化が研究された階層は報文, 資料, 生活学, 風俗の各論文において若干異なり, ②家政誌は中層の食文化に関して研究された論文が多く下層に関する論文が少なかった. これらのことから, ③家政誌では, 今後, 食文化が研究される対象者らの階層が拡大されること, 特に下層の食文化に関する論文も研究される必要があろう.

#### 4) 視角の明確さ

表5に, 食文化の研究対象として時代, 地域, 階層が選定される際の視角の明確さについて分析した結果を示した.

時代と地域と階層に関する視角を比べると, 報文, 資料, 風俗, 生活学, および3誌の食文化関連論文の合計のいずれも, 明確な論文は時代が多く, 階層に少なかった. 報文, 資料, 風俗, 生活学を比べると, 視角が明確な論文は, 時代に関する論文も地域に関する論文も階層に関する論文も報文と資料に少なかった. さらに, 対象に関する視角が, いずれも明確か, いずれか明確か, いずれも

不明確か検討したところ, いずれも明確な論文は報文に少なく風俗に多く, いずれも不明確な論文は報文と資料のみに見いだされた。

表5. 食文化が研究された時代や地域や階層に関する視角の明確さ % (編)

学会誌	食文化論文	視角の明確な論文			時代と地域と階層の視角		
		時代	地域	階層	A	B	C
家政誌	報文	81(100.0)	64( 79.0)	33(40.7)	17(21.0)	6( 7.4)	64(79.0)
	資料	32(100.0)	24( 75.0)	15(46.9)	13(40.6)	3( 9.4)	26(81.3)
	計	115(100.0)	89( 77.4)	49(42.6)	30(26.1)	9( 7.8)	92(80.0)
風 俗		76(100.0)	76(100.0)	50(65.8)	44(57.9)	27(35.5)	49(64.5)
生 活 学		41(100.0)	39( 95.1)	27(65.9)	12(29.3)	7(17.1)	34(82.9)
合 計		232(100.0)	204( 87.9)	126(54.3)	86(37.1)	43(18.5)	175(75.4)

注1) -: 該当論文なし, 注2) 食文化論文: 食文化関連論文, 注3) A: いずれも明確, 注4) B: いずれか明確, 注5) C: いずれも不明確

以上のことから, ①対象が選定される際の視角の明確さは報文, 資料, 生活学, 風俗の各論文において異なり, ②家政誌は風俗や生活学に比べ, 時代に関しても地域に関しても階層に関しても明確な視角で選定されているとはいえないが, 時代に関しては地域や階層より明確な視角で対象が選定されていた。これらのことから, ③家政誌では, 今後, 研究対象が明確な視角で選定されること, 特に階層に関して明確な視角で選定される必要があろう。

#### (4) 研究手法

食文化は, 主として, ①考古学的あるいは民俗学的な遺物資料や, ②古文書や統計書などの文字資料にもとづいたり, ③アンケートや聞き取りなどの調査によって研究される<sup>21)</sup>。ここでは, それらに④観察調査と, ⑤いずれにも属さない手法によった場合の5つに区分して検討した。表6に, その結果を示した。

表6. 研究手法

% (編)

学会誌	食文化論文	遺物資料			文字資料			調 査			観察	その他
		論文数	考古学的	民族学的	論文数	古文書	統計書	論文数	アンケート	聞き取り		
家政誌	報文	81(100.0)	1( 1.2)	1( 1.2)	—	25(30.9)	17(21.0)	10(12.3)	59(72.8)	49(60.5)	18(22.2)	7( 8.6)
	資料	32(100.0)	—	—	—	19(59.4)	14(43.8)	5(15.6)	14(43.8)	12(43.8)	4(12.5)	2( 6.3)
	計	115(100.0)	1( 0.9)	1( 0.9)	—	45(39.1)	32(27.8)	15(13.0)	74(64.3)	62(50.9)	22(19.1)	9( 7.8)
風 俗		76(100.0)	12(15.9)	11(14.5)	1( 1.3)	71(93.4)	71(93.4)	2( 2.6)	12(15.7)	—	12(15.7)	7( 9.2)
生 活 学		41(100.0)	3( 7.3)	2( 4.9)	1( 4.9)	17(41.5)	15(36.6)	10(24.4)	32(78.0)	18(43.9)	24(58.5)	16(39.0)
合 計		232(100.0)	16( 6.9)	14( 6.0)	2( 0.9)	133(57.3)	118(50.9)	27(11.6)	118(50.9)	80(34.5)	58(25.0)	32(13.8)

注1) -: 該当論文なし, 注2) 食文化論文: 食文化関連論文

3誌の食文化関連論文を合計すると, 文字資料にもとづいて, あるいは調査によって研究された論文が多く, 遺物資料にもとづいた論文が少なかった。また, 文字資料は, 古文書にもとづいた論文が特に多かった。

報文と生活学は調査による論文が, 風俗は文字資料にもとづいた論文が多く, 資料は文字資料にもとづいた, あるいは調査による論文が多かった。調査として, 報文は特にアンケートが多かった。生活学は聞き取りが多いもののアンケートも半数近くの論文でなされていた。文字資料とし



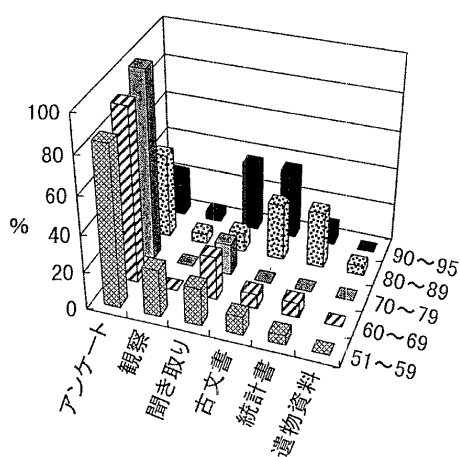


図3 報文における研究手法

■ 51~59 □ 60~69 ▨ 70~79  
 ▩ 80~89 ■ 90~95

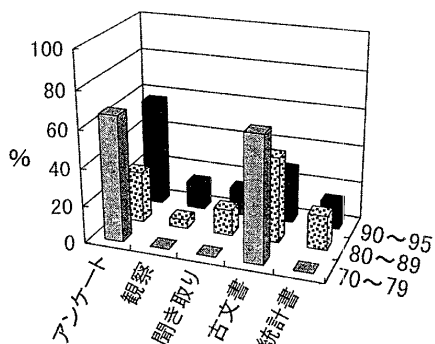


図4. 資料における研究手法

■ 70~79 □ 80~89 ■ 90~95

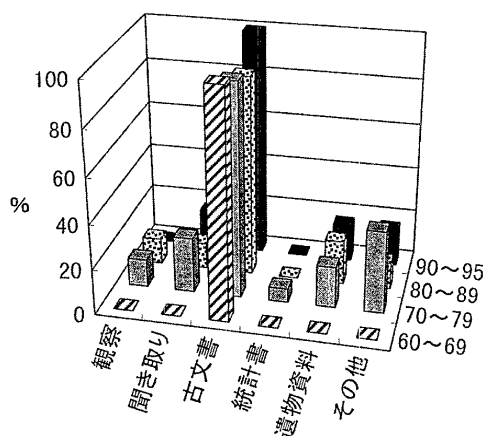


図5 風俗における研究手法

▨ 60~69 ▩ 70~79  
 ▩ 80~89 ■ 90~95

て、報文、資料、風俗、および生活学のいずれも古文書が多く利用されていたが、前3者は風俗に比べ統計書も利用されていた。また、風俗は調査による論文が報文、資料、生活学に比べ少なく、特にアンケートによる論文は皆無であった。

図3～6に、報文、資料、風俗、および生活学における研究手法を年代別に示した。ここでは、研究手法を①遺物資料、②古文書、③統計書、④アンケート、⑤聞き取り、⑥観察、⑦その他の7つで示してある。なお、表6に示したように、報文はその他が、資料はその他と遺物資料が、風俗はアンケートが皆無であったので、図中でこれらは省いてある。

報文において、アンケートによる論文はⅢ期まで多かったがⅣ期以降少なくなり、Ⅳ期以降古文書や聞き取りなどによる論文が多くなっていた(図3)。資料は、Ⅲ期は古文書やアンケートによる論文だけだったが、Ⅳ期以降他の手法が加わり、Ⅴ期にアンケートによる論文が最多となっていた(図4)。風俗は、いずれの年代も古文書による論文が圧倒的に多かった(図5)。生活学は、年代とともに、古文書や統計資料などによる論文が少なくなり、聞き取り、アンケートなどによる論文が増加している傾向にあった(図6)。

これらのことから、①食文化が研究された手法は報文、資料、生活学、風俗の各論文においてあるいは年代によって異なり、②風俗はいずれの年代も古文書による論文が多く、③報文は調査特にアンケートによる論文が多かったが、近年それに古文書や聞き取りによる論文も加わり、④資料はアンケートや古文書による論文に他の手法も加わり近年アンケートが最多となっていた。

研究手法が表6や図3～6のような結果となったのは、先に述べたように、家政誌の論文や学会誌の種類、あるいは年代によって食文化が研究された対象、特に時代や階層が異なっていたためであろう。つまり、報文は①Ⅲ期まで現代と中層に関する研究が主であったが、②Ⅳ期以降前近代や上層に関して、Ⅴ期には近代に関する研究も取り組まれるようになったため、③Ⅳ期以降アンケートによる論文が少なくなり古文書や聞き取りによる論文が多くなったと思われる。同様に、資料は①年代とともに前近代や上層に関して研究されなくなり、②現代や中層に関して研究されるように

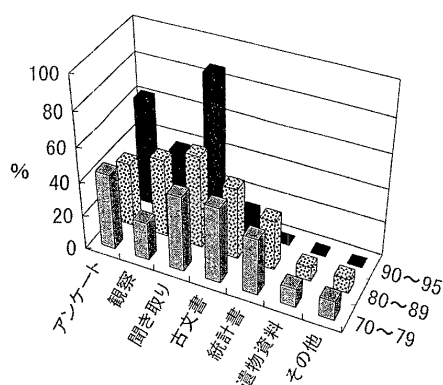


図6 生活学における研究手法

■ 70~79 ■ 80~89 ■ 90~95

図6 生活学における研究手法  
■ 70~79 ■ 80~89 ■ 90~95  
明に有効である。しかし、残されている資料が少なく、残されていても厨房施設や食器・食具など、資料の種類が限られている<sup>23)</sup>。

文献的手法は古代から現在まで幅広い時代の食文化の解明に有効である。しかし、残されている文献は文字を使用していた人々の、主としてハレ食に関する記録が多く、文字文化に無縁な階層の、しかも日常食に関する記録は極めて少ない<sup>23)</sup>。

聞き取り調査は、さまざまな階層の食文化が臨場感を伴って明らかにできるが、調査できる時代に限りがある。それは、調査対象者の年齢や性などによって、食文化の調査できる時代が限られ、現時点ではせいぜい明治の終わりか大正の初めごろまでだからである。また、聞き取り調査は、調査対象者との人間関係によって結果に微妙な差異が生じる可能性がある<sup>24)</sup>。さらに、1事例の調査にかなりの時間が必要なため、事例数を増やすといっても限度がある。

アンケート調査は、比較的短時間で広い地域における多くの事例が調査でき、さらに統計的な処理によって科学的分析が可能である。しかし、調査できる時代が、聞き取り調査と同様の理由で制限される。さらに、文字を媒体としているため、調査対象者が読み書きに不自由していない、つまり一定の学力を保有した人々に限られる。我が国の識字率は諸国外に比べ高いものの、現在でも読み書きに不自由な人々が存在している<sup>25)</sup>からである。

したがって、今後は手法の特徴や限界が配慮されつつ多様な手法が用いられて、あらゆる時代や地域や階層に関して研究されねばならないであろう。

ところで、研究手法を問題にする場合、統計的な処理の有無も検討されねばなるまい。表7に、有意差検定や多変量解析などの統計的な処理の有無を年代別に示した。なお、有意差検定は $\chi^2$ 検定、t検定、F検定など、多変量解析は因子分析、クラスター分析などが行われた場合とした。なお、風俗は、いずれの年代も統計的に処理された食文化関連論文（以下、統計的処理論文と略す）が

なったため、③古文書よりアンケートによる研究が主となったのであろう。生活学は①前近代や近代、上層に関して研究されなくなり現代や中層に関する研究が主となったため、②古文書による研究が少なくなりアンケートによる研究が主となったのであろう。一方、風俗は、①V期に前近代に関する研究が最多でなくなったとはいえ、②IV期まで前近代が、またいずれの時期も上層が最多であったため、③いずれの年代も古文書による研究が最多であったと思われる。

ところで、研究手法は研究される食文化の時代や階層と関連があるが、同時にそれぞれ特徴と限界も存在する。

例えば、考古学的手法は極めて古い時代の食文化の解

表7. 統計的な処理

(編)

年代	家 政 誌												生活学			
	報 文				資 料				計							
	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D	A	B	C	D
'51~50	20	3	3	—	—	—	—	—	20	3	3	—	—	—	—	—
'60~69	13	6	6	—	—	—	—	—	13	6	6	—	—	—	—	—
'70~79	6	2	2	—	3	1	1	—	9	3	3	—	9	2	—	2
'80~89	20	13	8	6	22	7	7	—	43	20	15	6	24	5	3	5
'90~95	22	10	10	2	7	2	2	—	30	13	13	1	8	2	2	1
合 計	81	34	29	7	32	10	10	—	115	45	40	7	41	9	5	8

1) —: 該当論文なし, 注2) A: 食文化関連論文, 注3) B: 有意差検定や多変量解析などの統計的な処理がなされた論文, 注4) B:  $\chi^2$ 検定, t検定, F検定などの有意差検定がなされた論文, 注5) D: 因子分析, クラスター分析などの多変量解析がなされた論文

皆無であったため、表に提示していない。

合計をみると、統計的処理論文は報文に多く、その傾向は年代別にも類似していた。これに対し、資料や生活学の統計的処理論文は半数以下であった。なお、統計的な処理として、家政誌は報文も資料も有意差検定、生活学は多変量解析がなされている傾向にあった。また、表に提示していないが、3誌の食文化関連論文を合計すると、統計的処理論文が54編（23.3%）で、統計的な処理として有意差検定が49編（19.4%）、多変量解析が15編（6.5%）でなされていた。

これらの結果と先に述べた研究手法から、①風俗は有意差検定や多変量解析などの統計的な処理が全くなされないで古文書によって食文化が明らかにされているが、②報文は調査による結果が統計的に処理されて、③資料は文字資料による結果で食文化が明らかにされている傾向にあるといえよう。

佐藤<sup>26)</sup>は、家政誌で家政学原論の論文が他領域に比べ報文が少なく資料が多いことについて、家政誌における論文審査と、投稿する研究者の意識の両面に問題があると指摘している。そして、その理由を、家政学原論の論文は実験や検査、調査、統計などの科学的といえる手法が用いられず、文献資料が用いられ、哲学的論理展開によって書かれている点をあげている。つまり、①社会学的手法で研究された家政学原論の論文は報文として掲載されにくいといった論文審査上の問題と、②報文として掲載されにくいことを予測してはじめてから資料として投稿する研究者の取り組み上の問題があると、指摘している<sup>27)</sup>。家政誌の食文化研究における研究手法を、①佐藤のいう調査と文献資料という観点からみると、合計は、文献資料による論文の割合が資料に、調査による論文の割合が報文に高かった。年代別にみると、この傾向はⅢ期までで、Ⅴ期に古文書による論文の割合が報文に、アンケートによる論文が資料に多くなっていた。しかし、②統計処理という観点からみると、いずれの年代も、統計的処理論文の割合は報文に多く資料に少なかった。したがって、食文化の分野に関して、佐藤の指摘のような問題が、①一つ目の観点は過去にあり近年は解消されつつあるが、②二つ目の観点は今も存在しているといえるのではなかろうか。

さて、古文書や聞き取りだとその事例の食文化が質的に把握される。そして、事例を重ねることで食文化が普遍化される。アンケートや統計書だとある集団の食文化が量的に把握され、さらに統計的な処理によって食文化が普遍化される。つまり、古文書や聞き取りなどによる事例の研究は質的手法、アンケートや統計書と統計的な処理の組み合わせは量的手法であり、前者は質的側面から、後者は量的側面から、食文化の普遍化が目ざされる。先に述べたように、3誌の食文化関連論文を合計すると質的側面から食文化が明らかにされた論文が多いが、家政誌は量的側面から食文化が明らかにされた論文が多いようである。両方向からの食文化研究が必要と考えるならば、今後、家政誌ではさらに質的手法による食文化研究も取り組まれねばなるまい。

#### 4. 要約

家政誌における食文化研究の動向を探るために、「人間が自然や社会に対処しながら蓄積し、蓄積している食に関する行動様式の総体」にかかわる研究が行われたと思われる論文を取り出し、掲載状態、研究の内容、対象、および手法を検討した。比較のために、日本生活学会および日本風俗史学会の学会誌の論文についても検討した。分析対象とされた食文化にかかわる論文は、家政誌の115編（報文81編、資料32編、ノート2編）、生活学の41編、風俗の76編、計232編である。その結果、次のことが明らかとなった。

- (1) 家政誌は、風俗や生活学に比べ、食文化にかかわる論文の数は多いが全掲載論文に占める割合は低く、報文としてでなく資料として掲載される傾向にあった。

- (2) 家政誌の食文化関連論文は, 風俗や生活学と同様に, 貯蔵・調理加工・献立作成など, 調整段階にかかわる食行動が研究されている論文が多かった。
- (3) 食文化が研究されている時代や地域や階層は3誌で異なり, 家政誌は, 時代として現代, 地域として国内の都市, 階層として中層に関する食文化が研究されている論文が多かった。また, 家政誌は, 研究対象とされた時代や地域や階層が選定される際, 視角が不明確な傾向にあった。
- (4) 食文化の研究手法は3誌で異なり, 家政誌は他の2誌に比べ, アンケート調査が行われたり, 統計的に処理された論文が多い傾向にあった。この傾向は特に報文に見いだされた。このことから, 家政誌, 特に報文は, 質的手法によってでなく量的手法によって食文化が明らかにされていると推察された。

上記の結果から, 家政誌における今後の食文化研究の課題として, 以下の点が示唆された。

- (1) 時代として前近代や近代, 地域として国外や国内の漁村, および階層として下層に関する食文化が研究されること, つまり対象が拡大されるとともに, それらの対象が明確な視角で選定されること。
- (2) アンケート調査と統計的処理を組み合わせた量的手法だけでなく, 文献的研究, 考古学的研究, 聞き取り調査, 観察などの事例的研究による質的手法も導入されること。
- (3) それによって, 食文化にかかわる研究が他分野と比肩できるように活性化されること。

本研究は平成7年度日本家政学会第47回大会(奈良女子大学)で報告した内容をさらに発展させて, 平成9年度日本家政学会第49回大会(共立女子大学)で報告した。

## 引用文献

- 1) 稲垣長典, 回顧と展望, 栄養・食品学, 家政誌, 30, 19-22 (1979); 杉田浩一, 家政学研究の推移・動向 (1979 ~ 1987) 食物学, 家政誌, 39, 517-521 (1988)
- 2) 酒井豊子, 本間博文, 衣・食・住の科学, 放送大学教育振興会, 東京, 32 (1996)
- 3) 石毛直道, 東アジアの食の文化, 平凡社, 東京, 38 (1981); 石毛直道, 食事の文明論, 中央公論社, 東京, 2 (1982); 石毛直道, 昭和の食, ドメス出版, 東京, 163 (1989)
- 4) 石川寛子, 食生活の成立と展開, 放送大学教育振興会, 東京, 14 (1995)
- 5) 杉田浩一, 調理の文化, ドメス出版, 東京, 153 (1985)
- 6) 豊川裕之, 日本の食文化 食の構造, 全国食糧振興会, 東京, 158 (1984)
- 7) 米川五郎, 馬路泰蔵, 食生活論, 有菱閣, 東京, 30 (1990)
- 8) 佐藤真弓, 『家政学雑誌』における報文数および報文内容分析, 家政誌, 42, 937-948 (1991)
- 9) 石垣志津子, 山口久子, 森川きく, 武藤富美子, 農家主婦の健康・家政管理に関する調査研究 (第1報), 家政誌, 24, 409-417 (1973)
- 10) 伊藤うめの, 葉茶の引用の歴史 (第二報), 風俗, 12, 4, 40-64 (1974)
- 11) 川田貞夫, 江戸時代後期における1幕吏の生活, 風俗, 4, 4, 11-20 (1964)
- 12) 山口昌伴, 台所空間の変遷, 生活学, 6, 183-220 (1980)
- 13) 鈴木解雄, 遺跡と文書に見る古代の廚, 風俗, 21, 1, 11-18 (1982)
- 14) 梅川光隆, 中世京都の採暖・炊事の炉, 風俗, 32, 3, 2-61 (1994)
- 15) 長尾幸子, 西鶴文学における近世上方町人の食事知識と食生活, 風俗, 13, 1, 48-74 (1974)
- 16) 小野一成, 「中等社会」の日常生活, 風俗, 18, 3/4, 33-46 (1980)
- 17) 鷹背テル, 食慣行の生態調査 (第2報), 家政誌, 9, 110-118 (1958)

- 18) 楠屋美津代, 兵庫県西宮北口団地における食物調査, 家政誌, 16, 203-207 (1965)
- 19) 前掲書 14)
- 20) 磯田厚子, 足立己幸, 加工食品使用につながる食情報接触行動について, 生活学, 6, 127-151 (1980)
- 21) 石毛直道, 論集 東アジアの食事文化, 平凡社, 東京, 39 (1985); 市毛弘子, 索餅の起源と用いられ方, および索餅から索麺への変遷過程 (第1報), 家政誌, 37, 453-463 (1986); 前掲書 4)
- 22) 前掲書 4)
- 23) 前掲書 4)
- 24) 曾和信一, 坂上優子, 堀正嗣, 被差別の生活と文化, 明石書店, 159-163 (1991)
- 25) 小沢有作, 物知り教育から解放教育へ, 明石書店, 23-30 (1994)
- 26) 前掲書 8)
- 27) 前掲書 8)